

## 清水村山城跡

浦井直幸

### はじめに

大分県教育委員会は平成7年～15年にかけて中世城館悉皆調査を行い、県内に推定地も含め569箇所の城館跡が所在することを報告した（大分県2003b）。その中には詳細不明や場所不明とされた城館もあり、現在筆者はこれらの城館の調査を行っている。本報告は、近年この調査の中で確認した宇佐市大字清水に所在する城館遺構に関するものである。現在その北端は清水村山城跡として周知されているが、城館遺構の詳細は管見の限り確認できないため以下に紹介・考察する。



### 1. 遺構の状況

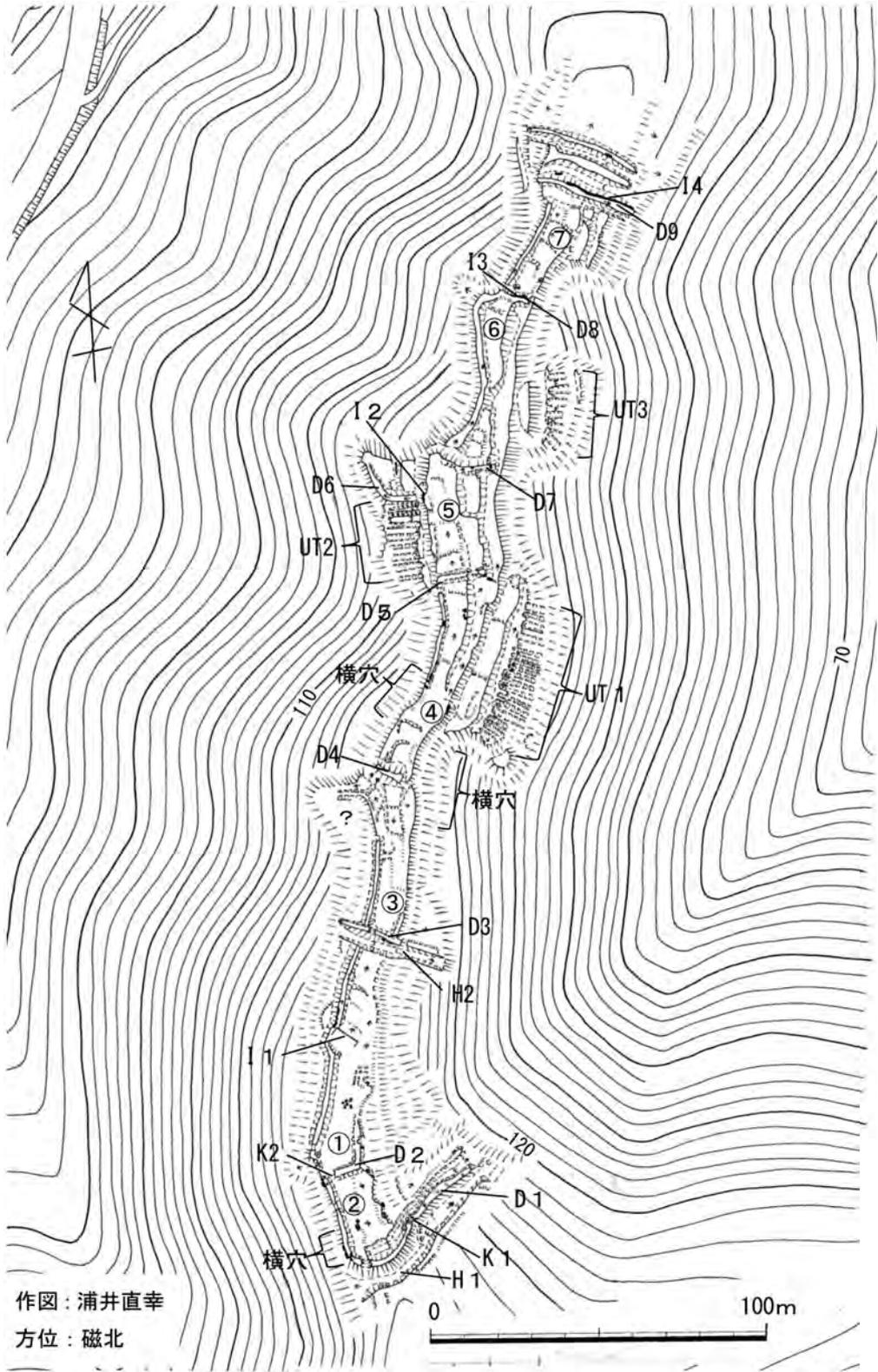
〈立地〉大字清水は宇佐市西端の地域で中津市と境を接する。曹洞宗の清水寺が鎮座し、遺構は清水寺の東を走る県道を挟んだ丘陵に所在する。遺構のある最高所の標高は約135mである。

〈遺構〉南北約360m、幅10mに満たない尾根やその周辺に細長く遺構を展開させる連郭式の城郭である（第2図）。主郭は曲輪①もしくは②と考えられ、②の南は最大幅8m、長さ50m、最大深約5mの大堀切（H1）を構築する（第3図）。H1は北に幅1～2m、の土塁（D1）を伴い、土塁中間に石垣で出入口を固めた虎口（K1）が設けられている。虎口西側の土塁端部は略方形に肥厚し、D1の北側は豎堀の名残とみられる浅い溝が併走する。D1の西端と曲輪②西塁線との接点付近は近代の作業道により削平されている。西塁線の土塁の一部は基底を石で固め北へ延びる。この「西塁線を防備する土塁」は曲輪②に限らず、後述する尾根上に所在する曲輪の大部分にも認められる。



第1図 調査箇所位置図

曲輪①と②は高低差があまりなくどちらが主郭か判断し難い。両曲輪とも東塁線の造成はあまく、自然地形を呈する点は共通する。ただし、曲輪境のD2は①の東塁線の一部も囲み、虎口（K2）も認められるなど防備の堅いことから、本稿では曲輪①を主郭としておく。曲輪①は延長70



第2図 縄張り図

mあり本城郭中最も規模が大きく、南半は平坦で北半は緩やかに傾斜する。中央付近には平面「コ」字状の石垣（I1）が認められる。I1は高さ50cm、3段程度安山岩を積む。石材には幅7cm前後、深さ6cm前後の小型の矢穴痕跡が残るため、近世後半以降の構造物と考えられる。このI1により西塁線の土塁（第4図）は一部破壊されており、土塁→石垣の順に構築されたことがわかる。なお、石垣南の転石群中に近代のドリル痕や採石に伴う石の木っ端が認められる。



第3図 堀切H1（西から）

曲輪①と曲輪③の境には最大幅5m、長さ30mの堀切（H2）がある。土塁（D3）はH2の北にあり、曲輪③南東角を囲み西塁線土塁に続く。西塁線の土塁は曲輪③の中間付近で東側に少し分岐しており、曲輪③南半全体がかつて土塁で囲繞されていた可能性もあり、重要なエリアであったことを窺わせる。西塁線斜面はブッシュのため遺構の有無は確認できていないものの北端に堅堀状の地形が残る。曲輪④との境は土塁（D4）で仕切り、土塁の北側・南側は方形を基調とした腰曲輪が各2段認められる。曲輪④西塁線土塁は腰曲輪西では認められないが、曲輪が平坦になる付近から出現し、基部を大型の石材で土留され北へ延びる。土塁は途中東へクランクし、曲輪⑤との境界となる（D5）。曲輪④東塁線下は、帯曲輪が2段展開し、その東斜面に畝状堅堀が16本構築されて



第4図 曲輪①西塁線土塁（北から）



第5図 土塁D8北面石垣（I3）

いる（UT1）。UT1は幅1.5～2m、長さ6～10m、深さは浅く1本1本は規模の小さいものである。畝状堅堀は続く曲輪⑤の西塁線土塁斜面にも8本認められる（UT2）。UT2は幅2m、長さ10m、深さ1m前後あり、UT1に比べると規模が大きい。最も北側の堅堀は下部が北へ曲がる土塁（D6）を伴い、D6の北端部は端部を張り出させている。D6北には高さのある切岸による小曲輪が認められる。D6の東端と西塁線土塁の接点付近は石垣（I2）が構築されている。曲輪⑤北は土塁（D7）で曲輪⑥と区切られる。曲輪⑥は幅約1～2mの西塁線土塁が北へ延び、曲輪⑦を区切る土塁（D8）付近では屈曲部を張り出させており、斜面へ横矢を掛けられる構造となる。曲輪⑥の東斜面には幅2～3m、長さ6mの浅い畝状堅堀が6本構築されており（UT3）、その規模は



曲輪の東端に構築され、各曲輪の兵士のスムーズな移動を目的とした城道や東斜面から登り来る敵兵を迎え撃つ空間として機能したと考えられる。この構造は、県内では高崎城（大分市）などに類例が認められ、同城は主郭まで続く城道とみられる長大な帯曲輪の横に腰曲輪を連続させる防備体制を敷く。また、清水村山城のD5・7・8の東端は帯曲輪を狭めるように突出させている。この構造は大友宗麟の陣とされる吉見嶽城（久留米市）の曲輪C北西尾根の帯曲輪と類似する。宮武正登氏は、この帯曲輪について高崎城の帯曲輪と同じ発想とし、侵入時を想定した部分封鎖を図るため土塁（高崎城の場合は石塁）を突出させたとする（宮武2004）。

石垣については部分的に土塁基部やその法面に構築されており、全ての土塁を総石垣化する意図は見取れない。石材は本城郭の所在する丘陵で採取可能な自然石を多用し、矢穴をもつ加工石材の使用は近世後半以降と考えられるI1以外確認できない。積み方は規則性や斜めの勾配角度をもたず、無規格の石材を垂直に積み上げることを基本としており、このような形態状の特徴は中世の石垣に特有とされる（宮武2020）。天正16年に織豊系大名・黒田氏により構築が開始された中津城やその支城（平田城）の石垣などにはみられない積み方であり、在地色の強い石垣と捉えられる。

本城郭は畝状堅堀や石垣の形態から中世城郭的性格を有し、一方で曲輪配置や土塁・堀切の在り方は織豊系城郭の可能性のある障子ヶ岳城本城部と共通点があることがわかる。城郭が機能した年代は畝状堅堀の形態から天正後半期と考えられる。

## （2）構築主体者の検討

次に構築主体者について検討する。候補として、①在地領主、②黒田氏（天正15年入部）、③大友氏の3者が考えられる。これらについて先述した遺構の特徴及び関連する文献史料を参考にしながら検討してみたい。

①について、大字清水はかつて在地領主内尾氏の領域であった。天文年間に清水城主内尾掃部久重と内尾孫三郎がおり、天正5年に清水寺が大友義統の兵火に罹り、その子帯刀が天正14年に大友義統に従い佐野親重を討ったという（尾立1911）。また『豊州城堡記』（大分県2003a）の「清水切寄」の項に「清水寺伽藍観音堂…此外切寄数ヶ所有之…」とあり、清水寺周辺に切寄が数ヶ所存在したことがわかる。本城郭はその切寄の一つの可能性もあるが、規模・構造共に一在地領主の城とするには過分であり、現段階ではその可能性は低いと言わざるをえない。

次に②の黒田氏の城の可能性を検討する。この地に同氏による城郭の普請を示す文献史料は確認されていない。同氏に関連する城は、中津城・平田城のような高石垣を持つ城や、高森城・佐田城のように大規模な横堀を構築する城がある。本城郭は所々石垣を有すものの、自然石を垂直勾配に重ねて積み上げるなど在地性が強く、石垣の在り方から黒田氏による構築を導き出すことは難しい。一方、曲輪構造に障子ヶ岳城との類似点が認められるため、同氏による構築も排除できない。

次に③について検討する。大友氏と当地方との接点を示すものに次の史料がある。天正14年の「豊臣秀吉御内書」と「大友義統書状」である。それらによると大友義統は天正14年10月3日、豊

前の反乱軍を鎮圧するため「宇佐郡令著陣候」とあり、仙石秀久と共に宇佐郡へ出陣し、郡の過半の鎮圧に成功している(大分県2002 752「豊臣秀吉御内書」753「大友義統書状」)。また、江戸中期に記された『両豊記』(大分県1938)には当該期の事として、在地領主佐野氏討伐のため義統が千余騎でもって豊前国に討ち入り、「幕の嶺に旅陣を構へ、佐野の城を取圍む」とある。佐野城は本城郭から北東1.4kmの距離にある平地城館であり、佐野切寄とも称する。結果的に義統は佐野氏を討つが、島津氏の豊後侵入を知り府内へ引き返すことを与儀なくされる。①で紹介した内尾氏と佐野氏の争いを記した二次史料の内容も上記文献に即したものであろう。

ここで注目したいのは大友義統が仙石秀久と行動を共にし、佐野氏討伐のため幕の嶺と呼ばれる地に陣を構えていることである。幕の嶺は他の地誌類にも認められ、現在の中津市三光上秣付近の山林一帯と推測される本城郭とは至近距離の地である。そして、義統と豊臣大名の仙石秀久が行動を共にしている事実からは、特異な城郭プランを有す本城郭を同氏による影響と想定することを可能にする。一方、本城郭は石垣の構築手法や畝状堅堀など中世の要素も多く、帯曲輪の在り方に大友氏の城郭との類似点も認められる。よって、本城郭はそのグラウンドプランは織豊系の技術を導入し、部分的に大友氏が元々保持していた技法・技術が用いられたとみることも可能である。織豊系の技術の影響を受けていないと考える場合は、大友氏の築城技術の成熟形態と捉えられる。

以上のことから、構築主体の可能性としては②と③の可能性が残される結果となった。文献史料その他から③の大友義統の陣跡の可能性が高いと考えているが、この点や織豊系城郭の影響、既存城郭の改修の有無などについてはさらに研究を行い判断したい。

#### 4. おわりに

ここまで清水村山城跡について紹介・考察してきた。本城郭の構築主体について、仮に大友義統の陣跡とするならば、天正後半期の織豊系大名との接触段階における大友家の築城技術の一端を示す城郭といえる。

本稿では城郭の改修の有無や清水に所在する丸尾城との関連も言及できていない。また、矢穴石材の調査や古墳時代の横穴墓についても詳報できなかった。残された課題は多く、引き続き調査・研究を進めていきたい。また、遺跡範囲の見直しなど遺跡への保護措置が図られることを望みたい。

#### 参考文献

- ・大分県教育委員会2002『大分の中世城館 第1集』大分県文化財調査報告第148輯
- ・大分県教育委員会2003a『大分の中世城館 第2集』大分県文化財調査報告第160輯
- ・大分県教育委員会2003b『大分の中世城館 第3集』大分県文化財調査報告第161輯
- ・大分県郷土史料刊行会1938『両豊記』大分県郷土史料集成戦記篇
- ・尾立維孝1911『宇佐郡地頭伝記』

- ・小柳和宏・篠田健司2017『黒田氏VS大友氏～それぞれの城郭はいかに配置されたか～』北部九州中近世城郭研究会情報誌32
- ・福岡県教育委員会2016「障子ヶ岳域」『福岡県の中近世城館-豊前地域編-』福岡県文化財調査報告第254集
- ・宮武正登2004「高良山陣所群に見る大友氏関連城郭との構造的特質」『大分の中世城館 第4集』大分県文化財調査報告第170輯
- ・宮武正登2020『肥前名護屋城跡の研究 中近世以降期の築城技術』吉川弘文館